
地域高齢住民における 認知症の有病率・発症率・予後の 時代的变化：久山町研究

Trends in dementia prevalence, incidence,
and survival rate in a Japanese community: the Hisayama Study

小原知之^{1,2)*}、二宮利治²⁾

わが国では、高齢人口の急増に伴う認知症の社会的負担の軽減が喫緊の課題となっている。効率的な認知症対策を構築するためには、疫学研究によって地域住民における認知症の実態を把握する必要がある。そこで、福岡県久山町において1961年より継続中の疫学調査（久山町研究）の成績を用いて地域高齢住民における認知症の有病率・発症率・予後の時代的变化について検討した。この町では、1985年、1992年、1998年、2005年、2012年に65歳以上の全高齢住民を対象にした認知症の有病率調査を行った。各調査の受診率はいずれも90%以上と高かった。この5つの調査成績を比較したところ、認知症の粗有病率は1985年の6.7%から2012年の17.9%まで大幅に増加した。病型別にみると、血管性認知症（VaD）の有病率に明らかな時代的变化はなかったが、アルツハイマー型認知症（AD）の有病率は時代とともに有意に上昇した。これらの関係は性・年齢調整しても変わらなかったことから、わが国の認知症の有病率は人口の高齢化を超えて増加しているといえる。

つぎに認知症、とくにADの有病率が急増する要因を明らかにするために、1988年と2002年の久山町健診を受診した認知症のない65歳以上の住民803名、1,231名をそれぞれ10年間追跡して認知症の発

症率と認知症発症後の予後を比較し、その時代的变化を検討した。その結果、1988年のコホートにおける性・年齢調整したAD発症率（対1,000人年）は14.6、2002年のコホートは28.2と、後者の発症率は前者に比べ2.1倍有意に高かった。一方、VaD発症率はそれぞれ9.3、10.6と明らかな時代的变化は認めなかった。男女別の解析でも同様の傾向が認められ、とくに男性におけるAD発症率の増加が目立った。年齢階級別にみると、85歳以上の群におけるADの発症率に明らかな時代的变化は認めなかったが、65-69、70-74、75-79、80-84歳の各群ではいずれもADの発症率が時代とともに有意に上昇した。さらに、認知症発症後の予後の時代的变化を検討した結果、AD発症者の5年生存率は1988年のコホート50.7%、2002年のコホート75.1%とAD発症者の予後は時代とともに有意に改善した。VaD発症者の5年生存率はそれぞれ38.6%、52.6%と改善傾向にあったが、有意差は認められなかった。

以上より、わが国の認知症有病率が急増した背景には、認知症、とくにADの発症率が時代とともに有意に上昇したことに加えて、認知症発症後の予後が有意に改善したことがあると考えられる。

1) 九州大学大学院医学研究院 精神病態医学 Tomoyuki Ohara, M.D., Ph.D.*:

Department of Neuropsychiatry, Graduate School of Medical Sciences, Kyushu University, Fukuoka, Japan.

2) 九州大学大学院医学研究院 衛生・公衆衛生学 Tomoyuki Ohara, M.D., Ph.D.*, Toshiharu Ninomiya, M.D., Ph.D.:

Department of Epidemiology and Public Health, Graduate School of Medical Sciences, Kyushu University, Fukuoka, Japan.

引用文献

- 1) Ohara T, Hata J, Yoshida D, Mukai N, Nagata M, Iwaki T, Kitazono T, Kanba S, Kiyohara Y, Ninomiya T. Trends in dementia prevalence, incidence, and survival rate in a Japanese community. *Neurology* 2017 88(20):1925-1932.

この論文は、平成 30 年 6 月 9 日（土）第 22 回九州老年期認知症研究会で発表された内容です。